

2020 年度第 4 回生物多様性の保全に向けたネットワーク会議（なにわ ECO スクエア）議事要旨

日 時：2021 年 3 月 18 日（木）10～12 時

会 場：オンライン（zoom ミーティング）

参加者：26 人

共有資料：【資料 1】「大阪市生物多様性戦略」について（大阪市環境局）

【資料 2】生物多様性の恵みを感じるまち大阪 2050 に向けて（平井教授）

●第 3 回ネットワーク会議の振り返り

第 3 回の本会議終了後に参加者よりご提案いただいた「生物多様性の恵みを感じるまち大阪 2050 に向けて」について、事務局より紹介。

●「大阪市生物多様性戦略」について（大阪市環境局）

資料 1 に基づき、次期「大阪市生物多様性戦略」の策定状況について報告。

新たな戦略は SDGs の考え方を踏まえ、これまでの施策を継続充実し、一人ひとりの問題認識と解決のための行動変容を進めていきたい。長期戦略は引き続き「2050 年の生物多様性の恵みを感じるまち」を目指していく。実現には行政だけでなく、市民、環境 NGO/NPO、事業者など多様な主体とのパートナーシップの強化が必要と考えている。

新たな戦略は、わかりやすさの向上、ウィズコロナ・アフターコロナ社会への対応、ポスト 2020 生物多様性の枠組み等も記載し、4 つの基本戦略、12 の方針、50 の施策を示している。また、生活の中で生物多様性の保全に貢献する取組み例も示している。

本ネットワーク会議は、生物多様性保全に向けた連携共同の一つの形であり、新戦略に示している各取組み実行の主役になっていただきたいと考えている。会議開催により、多くの参加者を呼び、取組みを実行推進し、それらを大阪市から発信できるようになる事を期待している。

●生物多様性保全に向けた取組みにかかる分科会

5 つの議題について、分科会形式で意見交換を実施。意見等については、次のとおり。

① 企業が創る多様な主体のネットワーク（議題提案・進行：大和ハウス工業 西部洋晴）

大和ハウス工業より大阪城公園の連携管理について紹介。都市公園の管理のあり方や計画の進め方に市民意見を入れて欲しいという意見や、公園等での生物に配慮した管理や、動物園における日本や大阪の生き物を知る取組みなどの提案があった。各施設の集客効果を活かして、各所で自然体験プログラム等を実施しながら情報共有することにより、大阪における生物多様性の恵みを感じてもらえる発信が可能ではないかという意見があった。今後はこのネットワーク会議など、継続した情報共有の場づくりを大阪市にお願いしたいという声があった。

② 高校教員との連携、リーダー育成（議題提案・進行：ネイチャーおおさか 木村進）

30 年続く高校生との身近な自然調査の紹介。虫などに触れない子どもが激増している背景には、親世代の自然体験の無さが少なからず影響していると考えられる。子どもや若者に自然に興味を持たせ、生物多様性について気づかせるには、授業や宿題などで強制的に調査をさせるという手もあるが、教師自体自然体験のない世代も出てきており、環境教育に関する関心も低下していると考えられる。自然に興味を持たない層へのアプローチ方法として、映像やキャラクター（カマキリ博士など）を活用が効果的であるなどの提案が出された。

③ 環境教育プログラムを利用した身近な自然体験（議題提案・進行：ネイチャーおおさか 田中広樹）

都会の子ども達は自然体験が少なく、大阪で身近な自然というと琵琶湖などと言われるが、遠くに行かなくても、生活圏での生きものや自然を観察する機会を増やしていきたいという意見があった。

④ 行政への情報蓄積に向けた社会教育施設の活かし方（議題提案・進行：環境科学研究センター 秋田耕佑）

各団体・個人が所有する生物調査結果のデータ集約上の課題として、調査者の同定精度や種の識別能力には差があり、正確性の担保が挙げられた。博物館などは多忙で協力を得ることが難しい状況であるが、同定支援の仕組みを作りたいという意見があった。一方で、データ蓄積後の利用の流れが見えないと、提供者の意欲に欠け活用がされにくいという意見もあった。データの正確性担保

については、まずは色々な精度のものを含めて一元集約し、利用する時に精度について検討するというのが現実的であり、集約情報を一元化するにあたっては、中立的立場である行政機関を中心に情報を扱いやすい形で情報集約を担うべきという意見があった。また、低コストで同定精度を高めるツールとして、SNSの機能などを利用し、多くの人が互いに意見を交わしながら同定支援をしていくという方法もあるとの意見があった。

⑤ 日々の暮らしに生物多様性の恵みを取り込むアイデア（議題提案・進行：大阪市エコボランティア 苗田京子）

人間の健康を守るうえで必要不可欠なものとして、生物多様性保全に価値を置き、人々が日常の行動を変えていくように促したい。玄関やベランダに鉢植えを置くことで、草が生え、虫が来て、身近に生き物が暮らしていることを感じられることを例に挙げ、日常の行動を変えていく意識変容を進められるような取組みを提案していきたいとの意見があった。なにわECOスクエアを拠点にして豊かな自然を共有し、生態系を感じるきっかけを作るといった意見が出た。

●講演「生物多様性の恵みを感じるまち大阪の将来像」（大阪府立大学 平井規央教授）

資料2に基づき、各分科会テーマに沿った下記の先進的事例の紹介や、大阪・関西万博に向けた大阪ならではの生物多様性ショップや、大阪市産たこ焼きなどユニークな取組みをご提案いただいた。

①滋賀県の企業や自治体、NPOが協力したトンボの発見の取組み

②伊丹市での昆虫学会などでは中高生の研究発表の場づくり

③堺市での大学やNPOとの連携による教育支援、生きもの発見報告というWebサイトで市民が地図上にアップした生き物の写真データからのレッドリスト作成

●閉会（大阪市 あいさつ）

2050年のめざすまちの姿「生物多様性の恵みを感じるまち」に向けて、これから一人ひとりの力をお借りして進めていきたい。分科会での様々な意見、様々な切り口がある事を理解し、連携した取組みを進めていけたらと考えている。みなさんの力添えをいただきながら、生物多様性保全に向けた取組みを進めたいと考えている。引き続きこのネットワーク会議への参加をお願いしたい。